

平成18年度 ～ 平成20年度

徳島県学力向上推進事業
学力向上研究指定 研究発表

研究主題

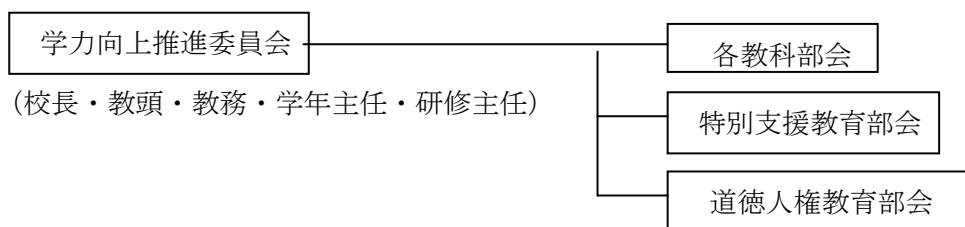
「確かな学力を育成するための学習指導の工夫」



牟岐町立牟岐中学校

I 研究のねらい

1 研究推進体制



2 研究主題の設定の理由

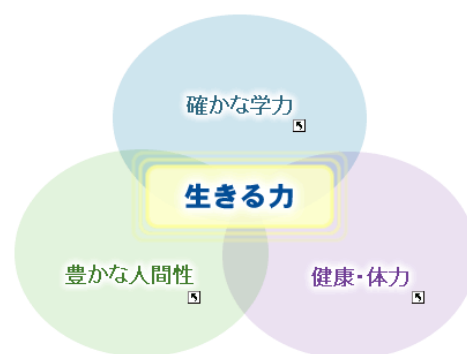
本校は、平成18年度から3年間にわたって徳島県教育委員会より「学力向上研究指定」を受けた。これは、義務教育へのスムーズな接続のための就学前教育と小学校との連携、小・中学校における個に応じた指導の充実等による学力向上への研究開発を行い、その成果を本県全体に普及することを目標に各5地域がモデル地域として指定されたものである。研究課題は、「幼保一体化」、「幼小連携」及び「各地域の創意工夫による学力向上策」であり、モデル地域はその中からテーマを選び研究を行うものである。

本校の場合は、牟岐町の地域指定ではあるものの牟岐中学校単独指定ということもあって「各地域の創意工夫による学力向上策」について取り組むこととし、具体的な研究主題として、少人数指導を中心に据えた「確かな学力を育成するための学習指導の工夫」を設定した。

3 研究構想

(1) 「生きる力」について

学習指導要領には、「生きる力」とは、変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに身に付けさせたい「確かな学力」、[豊かな人間性]、[健康と体力]の3つの要素からなる力であると定義づけられている。そして、それら3つの要素は右図のように三方に均等に広がりながら重なり合いそれぞれが有機的に関連しあって構成されている。

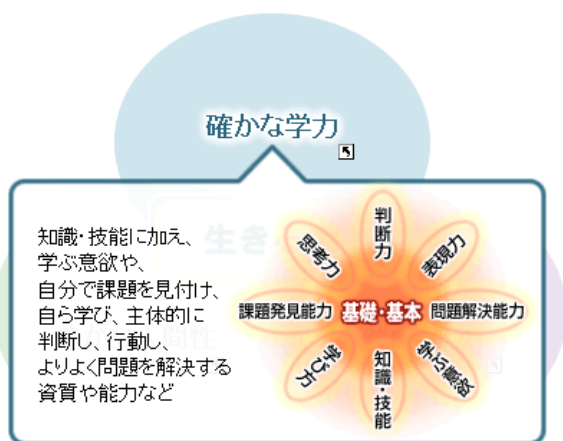


この3つの要素は均等に広がっているように見えながら、やはり「豊かな人間性」、[健康と体力]が「確かな学力」を支える形になっていることに着目したい。これは、学力と基本的な生活習慣との密接な関係性を示しており、この理念は、本校の掲げる「めざす生徒像」にも合致する。

(2) 「確かな学力」について

[生きる力]の知的側面である「確かな学力」の育成を図ろうとする考え方は、平成8年の中央教育審議会答申以来の一貫した考え方である。「確かな学力」とは、知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたものとされている。

左の図のように、「基礎・基本」を中心に「知識・技能」「学び方」「課題発見能力」「思考力」「判断力」「表現力」「課題解決能力」「学ぶ意欲」が、同心円状に広がっている。そのために、こういった指定研究では、他所とは違った取り組みを模索したり、今までにない方法を研究の中心に据えたいものだ。しかし、ここでもどっしりと中心に位置する「基礎・基本」を忘れず、あくまでも真下から支える形になっている「知識・技能」の習得をめざす教育活動が大切であることを確認した。



II 研究の概要

1 平成18年度の取り組み

(1) 研究のねらい

学力向上地域指定を県より3年間受けることになった。具体的には平成18年度の夏からの取り組みになる。当初は研究や実践が生徒のためにもなるだろうということで、快く引き受けたわけだが、いざその端につくとたちまち立ちつくしてしまった。つまり、なぜ今更「学力向上」ということなのか、あまりにも学校の使命としては原点のようなテーマなのでことさらにということである。さらに、研究発表ということで無理な取り組みはするまい、できるだけ職員全員に共通理解が図られ、足並みがそろうような取り組みであることを確認しあった。いうなれば「学力向上」というテーブルの上に、日ごろの教育活動を整理して載せるという作業が本年度の研究の中心になろうかと思われる。

(2) 研究の内容と経過

① 徳島県学力調査結果より再点検

「数学」においては「基礎的・基本的」項目をはじめ、どの項目においても県平均もしくは、それ以上の結果を収めている。ところが、「国語」においては「書くこと」の分野が低いことが分かった。そこで、国語、数学の教科についてこれからの方策を教科担任を中心に、学校全体としての取り組みとして話し合った。

《 国 語 》

- ・ ノート指導の充実
- ・ 視写を取り入れ，原稿用紙の使い方をはじめ「書くこと」の基礎・基本を学ばせる。
- ・ 文章を書く機会を充実させる。
- ・ 朝読書を継続し，さらに充実させる。
- ・ 生活記録など普段の生活の中で書く機会をとらえて指導する。

《 数 学 》

- ・ 単元末の問題などから，個々のつまずきを発見し，個に応じた指導をする。
- ・ 少人数指導を取り入れ，問題解決に手助けと時間が必要な生徒にあった支援を行う。
- ・ 補充学習や定期テスト前に質問の時間を設けるなど，学年全職員で指導にあたり，個に応じた指導をする。

②牟岐中学校の少人数指導

本校では，指導方法の改善の一環として「数学」「英語」「社会」において少人数指導を実践している。いくつかの教科において少人数指導を取り入れている学校は少なくないと思われるが本校における実践方法を紹介したい。

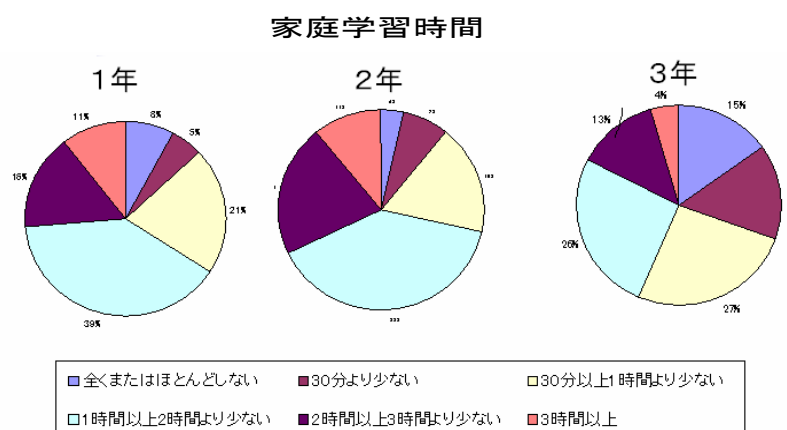
本校の少人数指導においては，学級を固定的に考えるよりも，グループ別や習熟度別，あるいは選択履修を増やすなど，生徒が小さな学習集団に分かれて多様な選択ができるようにする方向で取り組んでいる。つまり，生徒たちを習熟度別に分けて，完全に固定するという学習形態ではない。これによって，少人数学級に対する誤った偏見を払拭し，より有機的に機能していると思われる。ただ，学級間において指導内容の違いをつけにくいという一面がある。教育課程の変動などが認められにくいという一面もある。いつも，同じ進度で学習していなければならない。こういった面で，少人数指導におけるスタッフ同士の連携や指導方法の工夫改善が必要となるだろう。

③生活学習実態調査の結果分析

研究指定初年度ということもあって，いろいろな面から生徒たちの実態を把握しておく必要があり様々な調査を実施した。家庭での生活や学習状況，授業態度やその理解度までさまざまであるが，ここでは象徴的な2項目について挙げてみた。

・ 家庭学習時間

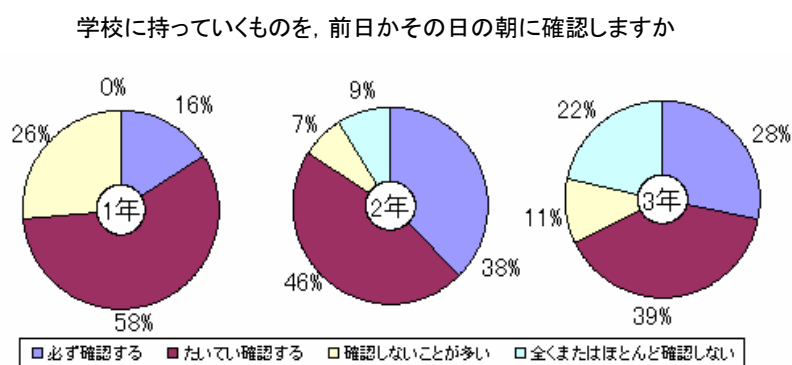
まず家庭学習時間であるが，1日30分以下と答えたものは県平均が19.7%である。本校の場合比較的2年生が安定しているが，それは30分以内の生徒の割合が少ないということにも現れている。し



かし、受験生であるはずの三年生の結果には唖然とさせられる。全く何もしないと答えた者が15%もあり、30分以下の者は県平均に比べ10ポイントも多い。

- ・学校に持っていくものを、前日かその日の朝に確認しますか

次に、「学校に持っていくものを、前日かその日の朝に確認しますか」という質問に対して、「全くしない」と答えたものが県平均で22.1%である。これも3年生の結果が悪く、「全くしない」「確認しないことが多い」を総合すると、家庭学習時間と同じように県平均よりも10ポイント悪い。このことから、「家庭学習時間」が30分以下のものと、「授業準備」を全くしないものの相関関係が見て取れる。これらは総じて学習の、つまりテストの平均点などの結果に比例してくる。



(3) 成果と課題

① 少人数指導より

平成18年度においては、「牟岐中学校の少人数指導法を確立させながら、すべての生徒の学力を向上させていく。」をテーマに校内研修に取り組んだ。研究授業では「数学」「英語」を中心に少人数指導法の工夫の様子を全職員で実感し共有した。ここでは、少人数指導法の成果と課題についてまとめておきたい。

《 成 果 》

- ・ 個に応じた指導がしやすい。
- ・ きめ細やかな指導ができる。
- ・ 個人の発表や発言の機会が増える。
- ・ 生徒自身が選ぶことで学習意欲につながる。
- ・ いい雰囲気がつくれ、安心して発表ができる。
- ・ 2人の教師により多面的に生徒を理解できる。
- ・ 応用・発展的課題の機会を与えられる。

《 課 題 》

- ・ 少人数クラスへの偏見を生ませないための、編成の際の支援・ガイダンスの充実が必要である。
- ・ 単元によっては少人数を希望する生徒数や個々の学習能力に差があり、指導しにくい。
- ・ 慣れが生じてゆるみがちになるときがある。
- ・ 担当する教師間の打ち合わせの確保をする。
- ・ 生徒・保護者の意見をくみ上げる。

②基本的な生活習慣

学力向上と基本的な生活習慣とは密接な関係にあり、家庭学習、翌日の学習準備などは学力向上と大きな関係があることがわかった。特に「早寝・早起き・朝ごはん」の大切さが痛感させられる。そして、このことに基づいて教師として、学校として、家庭に地域にどのような働きかけができるか。また、しなくてはならないかということがこれからの課題となるだろう。

2 平成19年度の取り組み

(1)研究のねらい

指定研究2年目ということで昨年取り組んだことをもとに、さらに発展的に推し進めていきたいという話し合いをもった。学校現場は、1年ごとのサイクル活動になっているが、今あるものを大切にしながら去年よりもより良くと願うスパイラル活動でなくてはならない。その考え方をもとに、「学力向上」のために、一人一人の教師が、学年が、学校が、家庭が、それぞれ何ができるのかを話し合い実践した。それらをまとめてみると以下ようになる。

- ① 「学力向上」を支える家庭の役割 … (基本的生活習慣の確立)
- ② 学校の体制作り …………… (少人数学級・2学年認同学級)
- ③ 学年・学級の取り組み …………… (学級指導の充実・補充学習)
- ④ 授業の充実 …………… (指導法の改善)

(2)研究の内容と経過

①「学力向上」を支える家庭の役割

「学力向上」を支える家庭の役割については、基本的生活習慣と密接なつながりがあることは前述の通りである。各種配布物やPTA研修会など様々な場において、また機会を作って呼びかけて行かなくてはならない。そして、それは家庭にとどまらず地域全体に呼びかけ協力を仰がなければならない。そういう意味からも地域指定のこういった研究は重要で昨年度は牟岐町教育会の場で1年目の発表を行った。

②学校の体制作り

19年度は指導法の工夫改善で1名の加配を受けている。本校独自の少人数指導については、自信をもつてのぞむことにした。新2年生は40名で昨年は1学級であったが、認可学級ということで2学級に分けた。授業時数は増えたが、学年としては、ずいぶん引き締め成果をあげている。

③学年・学級の取り組み

学年・学級の取り組みとしては、まず、毎月曜日の放課後行っている「学年裁量」の時間がある。この日はそれぞれの学年団が補充学習を行っている。さらに、各担任は、自主学習の提出率の100パーセント達成を目指して取り組んでいる。また、毎日の「朝読書」や「セミナー学習」など、生徒たちが直接影響を受けるのが、学年のまた担任の姿勢であろう。教師一人一人が何をなすべきか、ここが勝負どころである。

④授業の充実

学力向上に向けての本研究の大きな眼目は前述の少人数指導になるのだが、それにも増して大切なのは基本中の基本ともいえる一斉指導の充実といえる。少人数指導に関心が集まりすぎ、我々教師一人一人に少人数指導でないから思うような指導ができないとか、数学と英語はうらやましいなどという弱音が意識の中に生まれたりすることはよくない。また、そもそも一斉指導がうまくできない教師が少人数指導にたよっても充実した授業になるはずがない。そこで、教員全員が取り組める共通の取り組みを模索するとともに確認しあった。

平成18年度は、全員でチャイムと同時に授業をすることを共通理解し、確認した。当たり前のことを、当たり前に行うこと、そのことの難しさと重要さを学び、実践した。

平成19年度、それに加えて、次のことを生徒たちと約束するとともに、每学期末意識調査をした。

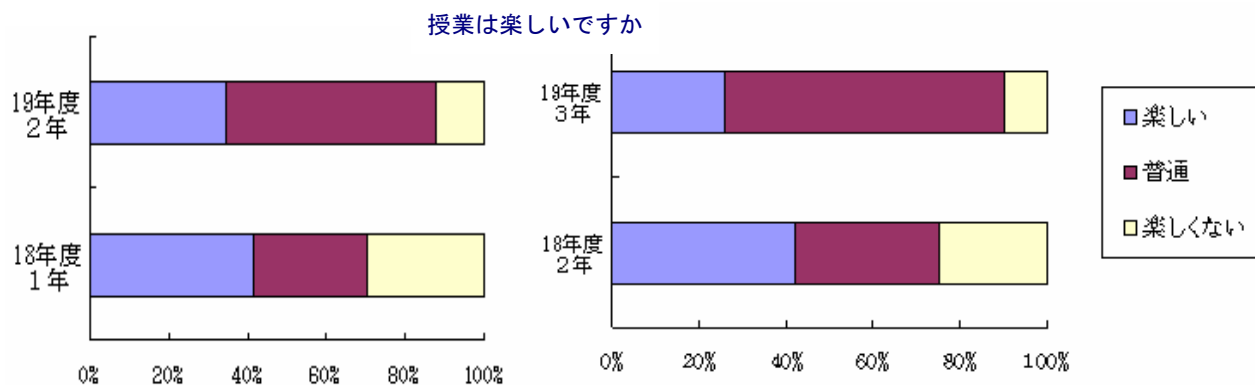
- ・ 眠らない
- ・ 机から足を出さない
- ・ 机にもたれない
- ・ 私語をしない

これらもごく普通の内容ではあるが、100%の達成はきわめて難しい。しかし、これらの授業態度や内容についての意識調査を定期的に行うことは意義深く、生徒も教員も意識の向上につながった。

次に、授業の内容についてであるが、毎時間「前時の復習」と「本時の確認」を前後5分程度ずつ入れていくことを共通で確認しあった。教科性や進度の違いはあるけれども、常に教師が「前時の復習」と「本時の確認」を取り入れることによって、どの授業にもめりはりが生じてくると思われるからだ。このような取り組みがどこまで成果をのばせるか、また、のばせたかは、今後の検証としての研究にゆだねなければならないが、とりあえず19年度10月時におけるアンケート結果を見ていただきたい。

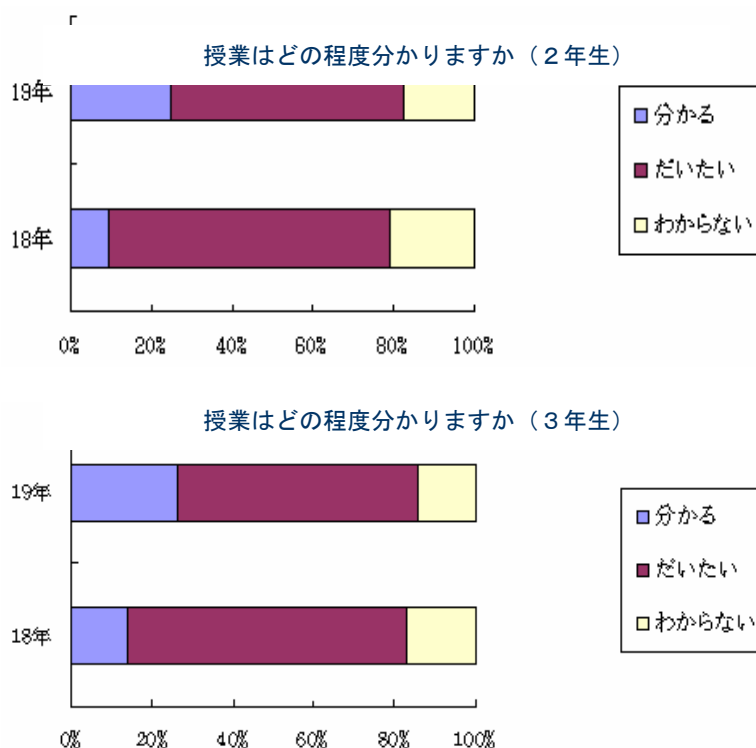
(3)成果と課題

①平成18年度と19年度の生活学習実態調査から



平成18年度は、様々な意識調査を行い、それを他の学年と比較することで、その実態を把握しようと考えた。本年度においては、1年半の取り組みを通して、その学年がどのような変化を遂げ、実績を上げることができたかを、去年と比較して検証していきたい。「授業は楽しいですか」という問いに対して、2年では「楽しい」と答えたものが少し減ったものの、「楽しくない」と答えたものが激減していることは特筆ものである。

3年生は、昨年度から最も安定的な学年色をしているとされていた。テストの点数などにも反映されている。そして、意識調査の結果においては、2年とほぼ同様の結果を表した。「楽しくない」と答えるものが減ったことは大歓迎であるが、「楽しい」が減っていることは少し問題であると言うべきか。生徒たちの思う「楽しい」とは、どのような状態を指すのかも考えてみなければならない。



次に「授業はどの程度分かりますか」という、意識調査を見ていただきたい。私たちは、よく生徒たちに「何が分からないのか」とか「分からないところはどこなのか、それが分かるように」というような言い方をすることがある。授業が「分かる」と断言してくれる生徒が、2年でも3年でも倍増以上していることは素晴らしいと考えたい。おそらく、一斉指導の改善などに取り組んだ成果や、2年生においては認可学級としての2学級にしたことも大きな要因となろう。

しかし、「分からない」と答えているものがほとんど変わっていないのも現実である。これは、この研究の当初からの課

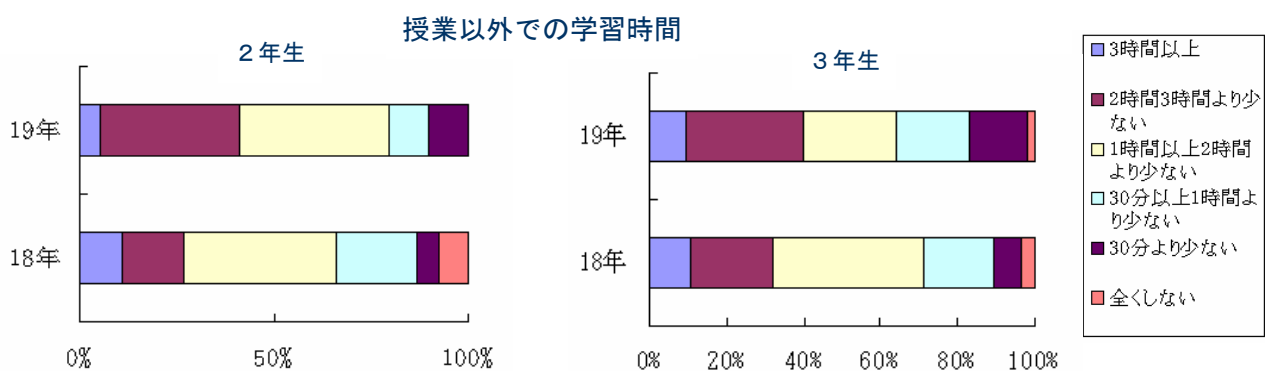
題であり，教育現場にとっての永遠のテーマともなる

かもしれない。

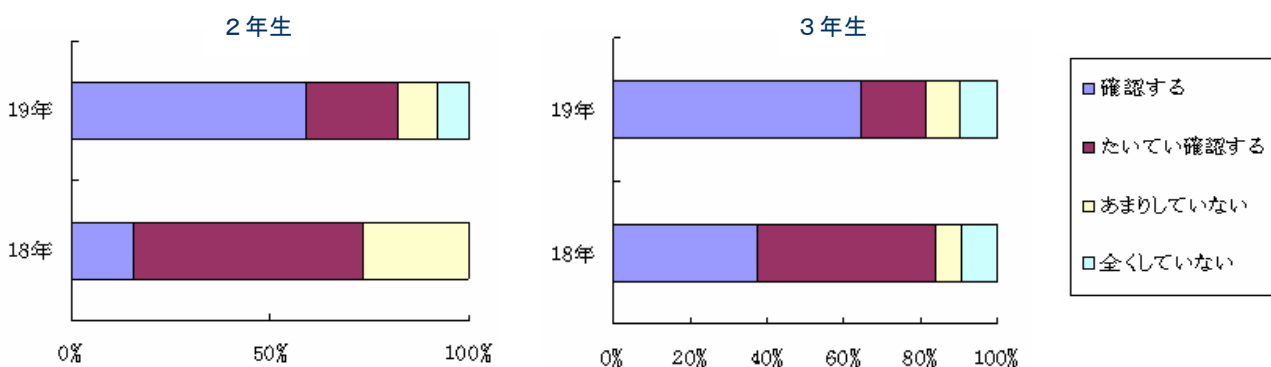
②学力向上を支えるもの

学力向上を支えるものとして，その根底にあるものはやはり基本的な生活習慣がどれほど確立されているかということになるだろう。学力向上に取り組んで1年半，生徒たちの家庭生活にどのような変化が見られたかをみてみたい。

家庭学習の時間についてであるが，2年生においては1年生の時点において比較すると格段に増えていることが分かる。3年生においてはそもそも安定した学年であったが，2時間以上が増えてきている。



学校に持っていくものを，前日かその日の朝に確認しますか



時間割の準備などにおいても，ずいぶんと改善されている。このような基本的な生活習慣の確立と学力向上の因果関係は深く，車の両輪のように取り組んでいかなければならない課題である。

3 平成20年度の取り組み

(1)研究のねらい

本年度も昨年度の研究主題、「確かな学力を育成するための学習指導の工夫について」を、引き継ぎ各教科指導の研修していくことに決定した。より効果的な少人数指導や、また各教科ともよくわかる指導の研究を深めていくことにより、個に応じたきめ細かな指導を目指して研究を進めた。

本年度の重点目標を次のように設定した。

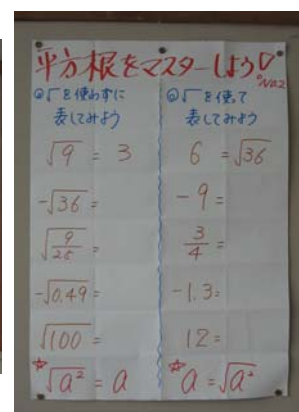
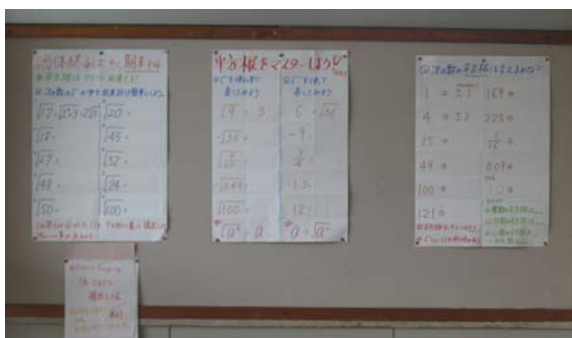
- ① すべての生徒に基礎基本の知識・技能を徹底させるために、教科指導の工夫、改善をし、個に応じた指導を充実させる。
- ② 学力向上を支える基本的な学習習慣を確立させる。
- ③ 読書活動を充実させることにより、読解力や表現力を養う。
- ④ 人権教育を通して共に学ぶことの大切さを知らせる。

(2)研究内容と経過

① 教科指導

各教科で、2年間の研究内容の継続として、基礎基本の力を付けるために、授業の始まりや終わりの時間を使って小プリント等を実施した。また月曜日の放課後を補充学習の時間と設定した。3学期には毎日放課後15分程度のプリント学習をし、特に指導が必要な生徒は長期の休みに補充学習を行い基礎基本の学力を定着させるようにした。

数学では、計算力をつけるために、授業の最初に小テストで訓練し、補充学習にも重点的に取り上げた。廊下の掲示板にも計算問題を掲示し、休み時



間などを利用して問題を解く雰囲気作りを行った。

・定期テスト

定期テストの結果を分析し個々の生徒に学習した内容がどれだけ身につけているかを把握することにした。定期テストは、問題作成者が平均60点になるように問題を作る。1学期の期末テストと2学期の期末テストを比較して個々の生徒が各教科において5点上げることを教師の具体的目標として取り組んだ。毎回平均60点の問題作成は困難であるという意見があったが、あえて挑戦してみることにした。

・各種確認テスト

全国学力・学習状況調査、徳島県学力調査は、数学、国語のみの調査であったので、他の教科が全国水準に比べてどの程度学力がついているのか把握できなかった。そこで、5教科を全国水準と比較できる標準学力検査を利用した。それを19年度、20年度4月に同一の

生徒に継続して実施し、その継続変化を見た。

② 基本的な学習習慣

基本的な学習習慣を身に付けるため、授業中の学習態度を学期ごとに振り返り、生徒の反省を促し、意識付けをした。今年度は次の4つの点に重点を置き、各教師が毎日の授業で意識的に実践した。

- ・授業中は私語をせず、集中して学習に取り組む。
- ・家庭学習をする。
- ・忘れ物をしない。
- ・チャイム着席をする。

家庭学習を習慣づけるために、毎日自主学習ノートを提出させ、その提出ができない生徒は居残り学習等で対応した。チャイム着席については、教師が早めに授業に行きチャイムと同時に授業が始めるように心がけた。学習実態調査を実施し、生徒教師が、学期に一度振り返る機会を持ち、次の学期に向けての改善を行った。

③ 読書活動

朝、読書タイムをもうけ、読書に親しむことにより読解力、表現力の向上や、心の成長を図るようにした。数値目標として、1年間で1人30冊の読書冊数を設定した。

④ 人権教育

人権問題学習を通して、お互いの人権を尊重し、認め合い、共に学ぶことの大切さを理解させるようにした。例えば、友達が困っているときに、自分にできることはないか考え行動したり、わからない問題を教えあうこと等を通して、「学び合う」雰囲気高めることにした。

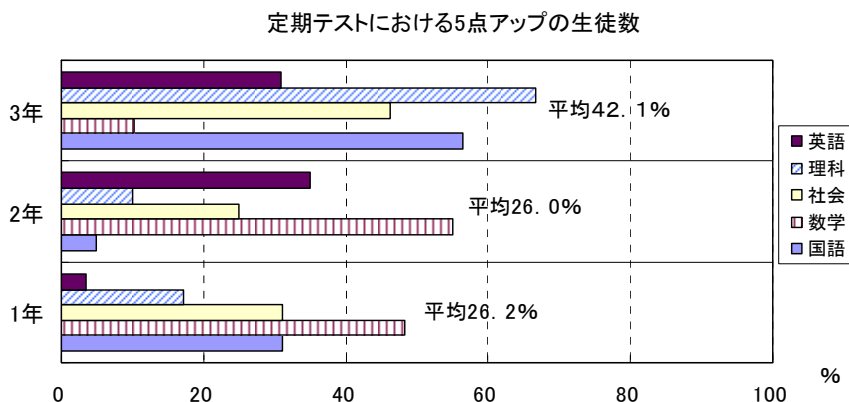


(3) 成果と課題

① 教科指導

・定期テストの結果分析

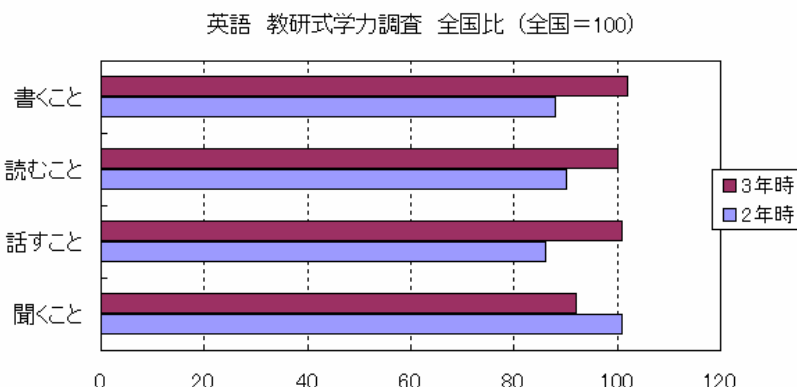
1学期の期末テストと2学期の期末テストの結果から、5点以上伸びた生徒の割合を調査した。3年生の生徒が5点以上伸びていた生徒が多かった。進学



を控えてよりまじめに学習に取り組んだ成果であろう。定期テストの結果を分析することにより、個々の生徒の学習内容の把握し、今後の指導の反省、改善点に気づいた。

・確認テスト（教研式全国標準学力検査）の結果分析

19年度の英語では、「話す、読む、書く」力が全国水準より低かった。そこで「書く」力を補うために、授業の始めに、単語、英作文の小プリントを実施した。補充学習にも「書く」「読む」内容を重点的に扱った。



その結果20年度は「話す、読む、書く」の力は全国水準のレベルに達したが、反対に「聞く」力は低くなった。このような調査結果から、生徒にどのような指導が必要とされているのか課題を見つけることができ、授業改善に役立った。2年間継続して同一の生徒を調査することができたので、1年間の指導の評価にも役立ち、今後の指導方針を導き出すことができた。

・全国学力・学習状況調査の結果

数学A（主として知識）の検証

文字式の意味を理解していない生徒が多く、このことが方程式の意味の理解不足につながっていると思われる。また、全国平均を上まわっている項目をみると、「反比例・一次関数の式を作ること」「連立方程式を解く」がよくできており、授業中での練習の成果であると思われる。

数学B（主として活用）の検証

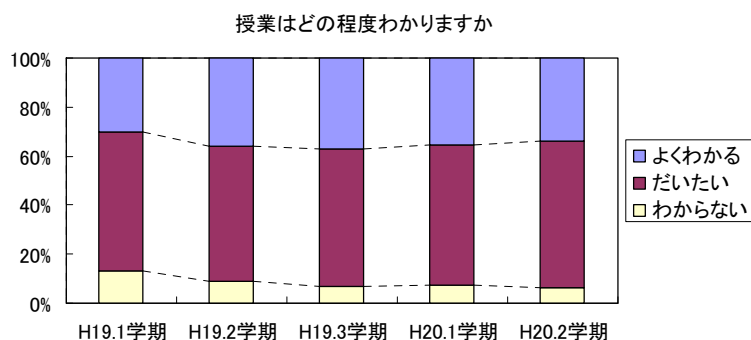
数学的な意味を考えること、文章を数学的に説明することが難しい生徒が多いと思われる。ただ、教科書や問題集などで一度練習している問題については、よくできている。新しい種類の問題に適応しにくいのではないかとと思われる。

全国学力学習状況調査の結果より、数学科の知識の領域の力は全国平均に近づきつつある。活用の力についても、同じような結果が出た。全国平均、県平均と比べることにより、本校生徒の苦手な領域、得意な領域等が把握でき、今後の指導の参考になった。

・少人数指導

少人数指導を行って、学習実態調査から「授業の内容はどの程度わかりますか。」という質問に対して「わからない」と答える生徒は少なくなってきた。個々の生徒にきめ細やかに教えることができた成果である。

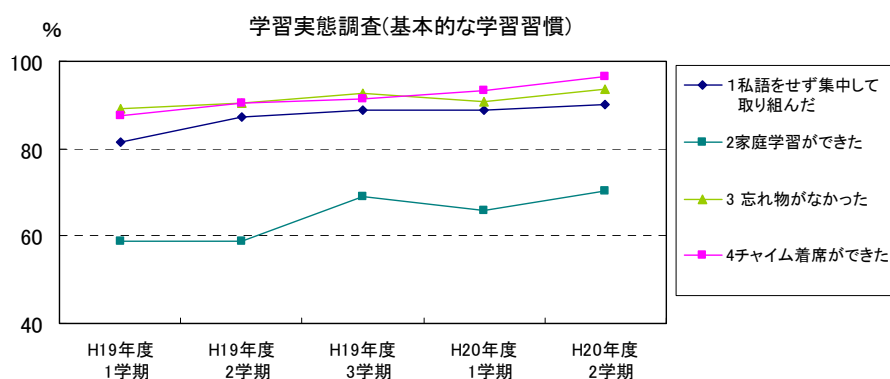
少人数のクラスで授業を受けている生徒の感想に「小さいクラスでは、勉強がわかりやすい」というのがあった。生徒の実態に応じた指導の工夫が、生徒に満足感を与え、ひいては個々の生徒の学習意欲をたかめ、「確かな学力」につながるのではないかと考える。



② 基本的な学習習慣

「自主学習ノート 100%の提出」ことを目標に取り組んだ。90%以上の生徒が提出できるようになった。

4つの重点項目に関しては、19年度、20年度の学習実態調査の経年変化を見ると右肩上がりになっており、よい習慣が定着しつつあることがわかる。



③ 朝の読書活動

朝の読書活動については、目標の冊数に遠く及ばなかった。テスト前には朝読書の時間を教科学習に切り替えることもあった。その他様々な理由考えられるが、今後生徒たちが無理なく読書に取り組めるように工夫していきたい。

④ 人権教育

わからない問題に出会った場合、教え合う雰囲気ができ、放課後に友達同士で問題解決をする姿を見かけられるようになった。また3年生などでは、すでに進路が決定した生徒が他の生徒に放課後教えている姿も見られた。自分で問題解決することも大事であるが、友達とのコミュニケーションを取りながら、「学び合う」学習形態も有効な方法であろう。このような雰囲気作りをし、お互いに高め合うことにより学力向上を目指していく態度をこれからも育てていきたい。

IV まとめ

学力向上に取り組んできた本校職員の感想を紹介する。

- ・教師自身の具体的な指導目標を立てて実行していかなければと反省している。これからの指針としていきたい。
- ・特に3年生が今の学力が保たれているのも、全職員が学力向上に取り組んだ成果ではないかと思う。
- ・教師は日々授業内容を工夫しているが、生徒の学習に対する意識が低いと感じることがあった。生徒の意識を変えなければと思う。また、学力がどの程度定着していつているのか不安になることがある。
- ・3年生は入試に向けての学力向上を第一の目標として取り組んできた。そのような中、学力向上を目指す生徒は三学期になってかなり増えてきた。何とかいい結果を残したいと思う。
- ・学力向上には基本的、基礎的な学習習慣の確立が必要であると思った。これからの課題はさらなる教師の授業力の向上ではないか。
- ・学力と基本的な生活習慣のかかわりはよく言われているが、改めて数字として現れた場合その意味の深さに痛感させられた。まずは生徒自身がコントロールできること、これが学力向上に結びついていくのである。
- ・定期テストを比較する上で、毎回テストの平均点を60点程度に作成することが難しかった。
- ・実技教科の面からどれだけ5教科に関わりがあるかを、折に触れ生徒に話してきた。
- ・集中力や発想力、文章力(表現力)をもっとつけさせたかった。
- ・学力向上に取り組んで自分自身の授業、定期テストに関しての意識が以前より高まったと思うので、よい機会を与えていただいたと思う。授業を工夫することにより、以前より自分の考えを表現することを楽しんでいる生徒が増えてきた。

3年間本校の全職員が毎日の学習活動の中で、教育活動のあらゆる場面をとらえて、学力向上に前向きに取り組んだ。その結果、基本的な学習習慣がつきつつあり、学習態度もよくなった。また、少人数指導を取り入れ、きめ細かな個別指導を行うことにより一人ひとりが大切にされ、生徒に満足感を与える授業ができつつあると思う。生徒自身にも、学力をつけたいという姿勢も見られるようになった。しかし、全国学力・学習状況調査等の結果を分析してみると、教師が願っていたほど学力は伸びなかった。学力向上の要因が総合的なものであるということを改めて痛感した。3年目に取り組んだ「学び合い」をさらに発展させることも一つの解決策だと考えられる。今後、本校の生徒の学力をつけるために、また、将来に向かって「生きる力」をはぐくむために何が必要なのかを深く見詰め、全職員が力を合わせて研修に取り組んでいきたい。